

この書物は、富山県でも一、二の基幹総合病院で、長年精神科医として勤務し、平成二十一年五月に亡くなられた窪田三樹男先生による、摂食障害に関する最初で最後の著作である。

窪田先生は、日頃から摂食障害の診療に精力的に取り組まれ、ご一緒した症例検討会では、いつも摂食障害のケースを出されていた。

その患者理解の深さ、経験の豊かさ、そして患者に注ぐ愛情の深さに、いつも感銘を受け、「関係学」をバックボーンにした、独自の精神病理学とともに、ぜひこれは、どこかできちんと今までの仕事をまとめて本にして頂きたいと、関係者すべてが願っていたと思う。

しかし、病に倒れられ、療養の甲斐なく亡くなられたと聞き、氏を失った悲しみとともに、氏の蓄積された、摂食障害についての叡知もまた永遠に失われたと、慨嘆せずにおれなかった。

ところが、それから一年ほど経ったある会の席上、遺稿が残されていると聞き、それが奥様の尽力と出版社の協力によって、出版される見込みと聞いて驚いた。

原稿を見せて頂いた時、窪田先生の生前の姿が彷彿とするようで、このような形で、先生の仕事が残されたことを心から喜ばずにおれない。

摂食障害は、周知のごとく、1960年代から増え始め、今も増加の一途をたどっている精神身体疾患である。今までさまざまな治療法が工夫されてきているものの、決め手となるものはなく、息の長い治療が、本人にも家族にも、治療者にも必要とされる。

最近むしろ、薬物療法の隆盛と相まって、本格的に摂食障害と向き合ってその本質を理解しようとする治療態度は、むしろ少なくなっているのではないかと思う。

摂食障害の本質は、氏も書かれている通り、単に体重が増えたとか減ったとか、食事が摂れたとか摂れないとか、という問題ではない。その背景にある、自己評価の極端な低さと、それをカバーしようとして行う、(結果として)間違った対処行動が、摂食障害の本質である。

その本質への理解と対応なくして、単に体重が増えたから外出を許可しましょう、退院しましょう、という治療では、全く無意味とは言わぬまでも、摂食障害の本当の治癒にはつながらないであろう。

窪田先生はそんな中で、徹底的に患者の言葉に耳を傾け、その患者理解に基づいて、治療的な工夫をさまざまに凝らされてきた。

この著作には、まさにその「智恵」と「勇気」のエッセンスが凝縮されていると思う。

窪田先生はその一方で、家族に対しては、多くの場合、決して優しい治療者ではなかった。患者を支えているのは、家族であり、その家族のサポートなしには患者の治療を進めることは難しい。もう少し家族を支えることも必要ではと思うこともあったが、この本を

読むと、それもやはり、患者に何とかよくなってほしいという熱意の現れだったのだと思う。

さて、この本の読み方について、読者の便宜のために、一言添えておきたい。

氏の理論は、本来、「関係学」という松村康平氏の創始した理論がバックボーンとなっている。そのために、文章の中には、ある意味強迫的、あるいは煩瑣と思えるところも少なくはない。

理論が好きな読者は、順番に読み進めて頂いたらよいであろうし、そういう文章になじまない方は、症例提示を中心に読み進めていって頂いてもよいと思う。

そこには、氏の理論に基づいた、実際のやりとりが生き生きと描かれているし、それを読むだけでも、摂食障害の本質を理解することが可能だと思う。

また、Ⅱ部、Ⅲ部に関しては、当事者、あるいは家族にとっては、少々つらいと感ずる著述も少なくない。しかしそれは、決して、氏が上から目線で、患者や家族を分析したというよりは、抱える困難を解決するために、まず現状を徹底的に見つめる必要があると思ったからだと思う。

それが分かるのは、第Ⅳ部の治療編であろう。ここには、いままで積み上げてきた理論をもとに、氏が工夫してきた、治療のエッセンスが述べられており、まさに窪田臨床の真骨頂があらわれている。「負の回廊」「虚の回廊」「舞台裏での治療」「生命の対話」などのキーワードは、すぐにでも明日の診療に役立つ内容と思われる。

時間のない人は、まずここから読み進め、必要に応じて、Ⅱ部Ⅲ部を参照する、という読み方もあると思う。

治療のやりとりを見ると、治療者が少し語りすぎでないかと思われる向きもあるだろうが、特に最近の若年の患者では、このようなある意味「説教療法」とも言えるような能動的な言葉かけが、患者にとって必要であり、安心感を与えると考えられてのことだと思う。

いずれにせよ、勿論これが摂食障害の唯一の治療ではないし、異論反論もあるだろう。

しかし、一人の、愛にあふれた治療者が、生涯かけて取り組んだ摂食障害の治療の記録は、われわれにとって、かけがえのない財産となるに間違いない。

最後に、浅学の身ながら、窪田先生の仕事の素晴らしさを最も身近に見聞きしていた一人として、このような文章を書かせて頂いたことを御容赦頂きたい。

謹んで、この書の発刊を心から祝い、窪田先生の遺志を、少しでも、摂食障害の患者家族の幸せのために、生かすことを誓いたい。

真生会富山病院心療内科
明橋大二